

特集：入学

昔話

渡辺 守（筑波大学 生命環境科学研究科）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。そろそろ新しい環境に慣れた頃でしょうか。君たちのキラキラした目を見ていますと、ついこの前だった自分の入学式を思い出します（年寄りが「ついこの前」と言ったときは、十一年前の事だと気が付きましようね）。その頃の昔話にお付き合い下さい。

君たちと同じように、あの時も、新2年生が新入生のお世話係で、ひととおり履修の「裏情報」を教えてくださいました。そして、さらに、

1. 学問の前では、誰でも平等だから、教授にも「さん」付けて呼ぶように（と言われても、年配の教授には恐れ多くて「先生」、助教授以下には「さん」がやっとなでしたけれど・・・）。
2. 大学生は自分で勉強するものだ（という事で自主的に休講したり、ビールを飲みながらの自主的なセミナーを深夜に開いたりしましたが、なかなか続かず・・・）
3. 生物学は広いのだ。どんな分野に進もうとも、山や海の自然は知らなくてはダメ（という事で、男女を問わず、毎月のように山登りに連れて行かれました。もちろん、授業はサボって・・・）。
4. 日本の行く末、世界の行く末を考えよ。専門馬鹿になるな（という事で、毎月のようにデモに行きました・・・）。

最後に、「君たちはサーコンの一員だ。」

えっ、「サーコン」って何？

それは「関東地区生物科学生連合」の略（生懇）だったのです。上級生から思い入れたっぷりにくどくどと聞かされた生懇の歴史は、いつか、機会を見つけてじっくりとお聞かせしましょう。ふふふ。

ともあれ、当時、関東地方の大学で、生物学科（やそれと同等の学科）をもっている大学はそれほど多くありませんでした。思いつくままに挙げてみると（記憶違いがあればご容赦を）、

東京大学、東京教育大学、お茶の水大学、東京学芸大学、千葉大学、埼玉大学、横浜国立大学、東京都立大学、横浜市立大学、早稲田大学、日本女子大学、東邦大学、北里大学

で、東京農工大学や東京農業大学などの農学系は入っていません。なお、各大学の生物学科の学生は半自動的に加入していましたが、大学院生は会員になっていませんでした。

生懇の活動は、月1回、日曜日に、例会と称する講演会でした。各大学持ち回りで行なわれ、それぞれの大学の先生が1時間ほど生物のトピックを話してくれます（ボヤッと聞いていて、後から、超有名な先生だったなんてこともありましたよ）。それに加えて「分科会」と呼ばれる生物学のいろいろな分野のセミナーがあり、どれかに加入しなければなりません。当時はやりの「分子生物学分科会」には希望者が殺到したため、分科会を2つに分

けたとか、はやらない「分類学分科会」では上級生の脅しめがいの勧誘があったとか、1年生の間には、いろんな噂が飛び回っていたものです。分科会の内容は、世話役（＝代表）の4年生によって、論文購読会だったり、大きな原著の輪読会だったり、飲み会だったり、デモに行くだけだったり（後からの噂ですけど・・・）と多彩でした。いずれにしても、分科会に出ますと、いろいろな大学の人と知り合いにならざるをえません。

入学したとき、「細胞」を「さいほう」と言って「お裁縫するの？」とからかわれ、「セル」とは何か知らなかったという純真さで、「セタイって何ですか」と聞いたのが運の尽き。「この子は生態学をやりたいんだって」というレッテルを貼られて「生態学分科会」へと連れて行かれてしまいました。代表は早稲田大学教育学部の4年生。「生態は落ち目で参加者が少ないんだよ」と言って歓迎してくれました。内容は、生態学のトピックを各自に割り当て、レポートです。場所は早稲田大学の近くの喫茶店。月に1回のセミナーで、いつも10人弱でやっていました。

喫茶店でのセミナーの開始は午後7時からでした。コーヒーを1杯注文し、延々と粘って10時を過ぎますと、昆布茶が出てきます。「一生懸命勉強している学生さんだから奢りだよ」とマスターが言ってくれたのを聞いて、いっばしの学生気分となりました。当時は、まだまだ学生運動が盛んで、特に早稲田はそのメッカです。あるとき、機動隊に追われて喫茶店に逃げ込んできた学生がいました。我々のテーブルの下に隠れましたので、みんなの鞆を彼の上に積み上げ、足でごまかし、何食わぬ顔でセミナーを続けた事もあります。結局、機動隊は喫茶店まで入ってこなかったのですが、この時ほど、セミナーのみんなと一体感をもった事はなかったですね。

セミナーが終わると11時を超えています。時々、分科会のOBで、院生になったお姉さん達が差し入れに来てくれました。冬、終電近くの東西線に乗って食べた差し入れの焼き芋の味は、まだ、覚えています。

生懇で活動したおかげで、いろいろな大学の人たちと出会う事が出来、良い事も悪い事も教えてもらいました。そして「生態学」のアウトラインを1年生のときに見る事が出来たのは、今から考えると幸運だったようです。というのは、その後「生態学」には革命が起こり、あの時、上級生から、手取り足取り教えてもらった生態学は、古き良き時代の古典（半分皮肉です）となって、生態学史の中に埋もれてしまったからです。とはいえ、デモ隊の騒音が時々入ってくる喫茶店で、低く抑えられた音色のクラシック音楽の中でのセミナーは、大学で、お仕着せのような授業と比べますと、はるかに頭の中に入ってくるように思えました（大学の講義では寝られても、喫茶店では寝られません。それに、他大学生の前では、見栄も張りたいですし・・・）。

残念ながら、生懇はもうありません。「おまえ達の学年がしつかりしなかったから、後輩が続かず、潰れたんだ」と機会があるごとに上からは叱責されました。しかし、大学紛争の余波が大学によって大きく異なり、東京教育大学が筑波大学となり、喫茶店が潰れ、学生の質が変わってしまいました。でも、ここでの活動の経験は、我々の世代では、いろいろな方面に生かされているようです。ある人は自然保護運動に、ある人たちは小中高の教師に、ある人は政権の中核にと。そして、こんな昔話を書くのが一人います。

生懇について、まだまだこの10倍は書けますが、もう、読み飽きたでしょう。大学1年生の1年間は、勉強に、遊びに、クラブに、生懇に、山歩きに、自然保護運動に、デモに、明け暮れて、あっという間に過ぎてしまいました。翌年は、もっと速く1年が過ぎ去ってしまいました。そして、その翌年はさらに速く……。さあ、君たちも、振り返ればあっという間だったと言えるほど、色々なチャレンジをしてみてください。それが、何年も経ちますと、きっと楽しい昔話になるはずです。

なお、この文章はネットで公開されています。あの時の生懇の皆様。お元気ですか？

Contributed by Mamoru Watanabe, Received April 19, 2010.